慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Gottfried Haberler; Der internationale Handel. (The Theory of International Trade, translated by Alfred Stonier and Frederic Benham, 1936.)
Sub Title	
Author	岩田, 仞
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.11 (1936. 11) ,p.1699(107)- 1704(112)
JaLC DOI	10.14991/001.19361101-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361101-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Gottfried Haberler; Der internationale Handel.

(The Theory of International Trade, translated by Alfred Stonier and Frederic Benham, 1936.)

岩田　仞

ハーベラーの著書「國際貿易理論」は、既に一九三三年獨乙に於て刊行されたものであるが、今回ストニヤー、ベンハム二氏の手に依つて英譯出版された。此の機會に本書の紹介を試みやうと思ふ。

英國に於て發展した古典學派貿易理論は、其の後温床を米國に見出して、其處に幾多の卓超した理論家が生れた。然るに歐洲大陸にあつては、實に閑散たるものであつた。その間にあつて一人ハーベラーのみ活潑な活躍を續けつゝある。

本書は貿易理論と貿易政策の二つの部分からなつて居る。

〔第一部〕貿易理論　彼は國際貿易理論を二つの部門に區分する。一は國際金融機構の分析であり、他は國際財貨移動機構の分析である。國際貿易現象が財貨と資金の交流關係である點よりして、適宜の處置と云へやう。更に彼は貿易理論上後者を支配的な命題、前者を從屬的な命題と看做す所の傳統的慣習を拒否して、國際金融機構の分析から始める。

さて彼の國際金融機構論の中心問題が爲替現象の説明であるのは當然の事であらう。その爲に先づ國際收支に關

Gottfried Haberler; Der internationale Handel, 1933. (The Theory of International Trade, translated by Alfred Stonier and Frederic Benham, 1936.)

する一應の解說を與へる。次に爲替相場が他の一般價格に於けると同樣に、需要と供給の關係に從つて變動する事、並びに金本位制度の下にあつては、爲替相場の變動に一定の限界の存する事を示す。かくして後、爲替理論として國際貸借說、インフレーション說、購買力平價說を順次說明し、その妥當範圍を論述するのである。最後に爲替相場に影響を及ぼす諸條件に關するやゝ詳細な說明を行ふ。以上が彼の國際金融機構論の內容であるが、我々は其處に理論上何等の新鮮味を見出し得ない。

國際經濟關係の貨幣的部面の分析を終へて、次に彼は財貨的部面の分析に移る。彼は之を純粹貿易理論(Die reine Theorie des internationalen Handels)と呼ぶ。其處では貿易現象の財貨側の考察、即ち「如何なる商品が輸出され或ひは輸入されるか。國際間に商品の移動が行はれるに必要な諸條件は何か。」の問題を取扱ふ。從來、特に古典學派論者が此の貿易發生の問題を貿易利益の問題と結びつけ、保護貿易主義に對する反對論據としたが、彼は此の事を批難する。此の點筆者も亦同感である。

而してハーベラーは、此の貿易發生の問題を解決し得る理論として、次の四つを擧げる。

(一) リカード、トーレンスに依つて提出され、ジエ・エス・ミル、ケアンズ、バステーブル、タウシッヒ等に依つて發展せしめられた比較生產費原理

(二) ジエ・エス・ミルの國際價値論、並びにそれを基礎とせるマーシャルの曲線分析

(三) パレートに依つて爲された一般的均衡理論

(四) シュッレル、バローネに依つて試みられた國際貿易現象の說明

之等の諸理論を彼は詳細に論じ、正統學派貿易理論發展史上顯はれた殆んど總ての理論が其處に網羅されて居る。

然もそれ等諸理論は、「互に排除し合ふ性質のものでなくして、相補ふべきものである。」と主張するのである。果して然りとすれば、筆者が且つて示した所の因果的價値思想としての(一)の比較生產費原理と、均衡思想としての(二)以下の諸理論との間に存する二律背反の問題は如何に取扱はれて居るであらうか。(拙稿「貿易理論の發展と貿易政策原理」(本誌十月號)特に第三節を參照せられたい。)ハーベラーは決して比較生產費原理を全面的に受入れるのではない。彼は該原理が勞働價値說に基礎付けられて居る事、從つてそれは勞働價値說にとつて必要な諸前提(勞働が唯一の生產要素であり、然も同質のものであり、賃銀率は常に平準化せられる事)の下に於てのみ主張し得る事、更に如何なる「眞實費用」の概念を以てしても之を改修し得ざる事を認める。かゝる欠陷にも拘らず、彼は貿易理論の出發點として比較生產費原理を採用するのである。その理由は何か。曰く、「我々は此の理論(比較生產費原理)をその總ての假定と共に放棄してしまふであらう、併し此の理論から得られた結果を廢棄する事はしない。それは丁度、且つて役に立つた足場が取除かれた後に於ても、建物のみは殘ると同樣に殘されるであらう。」(S. 97, p. 126.)と。彼の意味する所は、比較生產費原理と云ふ說明形式は各國に於ける相對的價格を決定する爲めに必要であるが、それは古典學派論者の如く勞働價値說乃至眞實費用說に依つて基礎付けられたものであつてはならないと云ふ事である。換言すれば勞働價値說と云ふ足場に依つて作られた各國の相對的價格決定の說明方法(即ち比較生產費原理)は、その足場を取去つた後に於ても殘されるべきであると云ふのである。而してハーベラーは此の各國價格平準間の關係の說明としての比較生產費原理を、近代的均衡理論を以て基礎付ける。此の點ニコルソン、タウシッヒ等の貨幣費用に依る直接的改修より一歩進んだものと云ひ得る。彼は「國際貿易と一般的均衡」なる章をその說明に當てゝ居るのである。其處では各商品の交換比率が Das Substitutionsverhältnis に依つて決定される事が說明

Gottfried Haberler; Der internationale Handel, 1933. (The Theory of International Trade, translated by Alfred Stonier and Frederic Benham, 1936.)

されて居る。曰く、「二商品間の交換比率は、それ等の（間接的な）Das Substitutionsverhältnis 即ち oppertunity cost に等しい。」從つて、「勞働價値說が必要とする單純化と云ふ假定なくしても、比較的利益の理論は完全に保持し得るのである。」と。而して彼は更に進んで、「此の理論から引出される所の、無拘束の國際交易は全當事國にとつて利益であると云ふ命題に對しても、當然同じ事が適用される。」。（S. 137, d. 182.）と云ふ。併し乍ら此の點に關しては聊か疑問がある。即ちハーベラーが、比較生產費原理を一般的均衡原理の適用に依つて改修し、その理論上の欠陷を救つたとしても、その事が直ちに貿易政策原理としての意味に於ても云ひ得るとは考へられない。否寧ろ、勞働價値說を放棄する事に依つて客觀的價値思想から離れ、貿易現象の絕對的基準は失はれてしまふのである。從つて彼が「分業が全生產物の增加を來すと云ふ論證が、勞働價値說を採つた際と全く同樣になされる。」と主張するのは誤謬である。彼の貿易理論の支柱が均衡原理である以上、その示し得る事は貿易の絕對的利益ではなくして、相對的影響なのである。從つて彼も亦右の言に次いで曰く、「併し乍ら一つの新しい問題が發生する。即ち種々なる生產要素への全生產物の分配關係の變化である。」此の貿易の國內的影響こそ均衡原理の取扱ひ得る命題であり、然もそれは更にかゝる物質的な富の分配としての問題ではなく、價格變化に基く貨幣的收入の分配としての問題である。彼は此の事に關し、「國際貿易の國民的收入の分配に對する影響」と題して次の如く說明する。

「（一）商品の國際交易は、他の產業に比して比較的多く使用される所の、一國輸出產業特有の生產要素の價格は騰貴する原因となる。

（二）それは、一國にとつて比較的不利益な、從つて縮少或ひは放擲しなければならないやうな產業に特有の生產要素の價格を下落せしめる原因となる。

（三）それは、全生產高を增加するからして、多くの異つた仕事に使用し得る非特殊的な生產要素の價格を騰貴せしめる。併しその騰貴は（一）の騰貴程大ではない。

換言すれば（二）の種類の生產要素の所有者の收入は低下し、（一）の種類の生產要素所有者の收入は高上し、（三）の種類の生產要素所有者の收入も亦高上する、併しより少ない程度に於てゞある。」（S. 145, pp. 193-4.）と。以上が彼の貿易の及ぼす經濟的影響に關する基本的な說明である。

（第二部）貿易政策　第二部に於て特に注意を引く事は、彼自身云へる如く、「貿易政策から生じる總ての問題に對して、理論的分析を適用せしめるべく努めた。」事である。從來此の種の書が多くの場合、貿易理論と貿易政策を各々別個に、然も何等の關聯もなく切離して取扱ふ事を考へる時、此の心構へは異色あるものと云へやう。

ハーベラーは先づ第一に貿易政策原理に關する彼の見解を把握する。彼はマックス・ウエーバーに從つて、貿易政策の目的設定は科學としての經濟學の範圍外にある事を主張するのである。貿易政策の科學的研究は、一定の目的に對する適當な具體的手段を求め、その手段がその目的にとつて適當であるか否かを立證するに過ぎない。從つて目的自身は政策者の主觀的判斷に依つて決するより外はないと云ふのである。曰く、「價値評價を行ふ事は科學の任務ではない、又それをなす地位にあるものでもない。例へば、自由貿易が正しい貿易政策である事を示す事は不可能である。たゞ自由貿易或ひは保護貿易が一國に及ぼす結果は如何なるものであるかを示し得るに過ぎない。併し乍ら此の事からして科學は一定の與へられた目的（又は議論の爲めに與へられたと考へられて居る目的）を達成する爲めには如何なる手段がとられるべきか、又一定の目的に對して一定の手段が果して適當であるか否かを決定する地位にあると云ふ事が云ひ得る。」（S. 159, p. 213）と。此の點に於て彼の主張は古典學派論者の自由貿易主義の

Gottfried Haberler; Der internationale Handel, 1933. (The Theory of International Trade, translated by Alfred Stonier and Frederic Benham, 1936.)

主張が經濟現象の客觀的認識から必然的に生じた政策的要求であつた事と著しい對照をなすものである。

かくて彼は貿易政策の目的を非經濟的目的と經濟的目的とに區別して論じる。經濟的目的としては從來生產力の發展、富の增加、經濟的幸福の增進等が云はれて居るが、之等は結局國民的收入の絕對的增加なる事實に歸着すると云ふ。更に此の增加した社會的生產物の各個人への分配樣態が問題となる。從つて此の二者が經濟的目的の基準として考へられると云ふのである。

次に彼は許多ある從來の自由貿易論、保護貿易論の殆んど總てを持來つて之を說明し、更に關稅の影響を論じる事に依つてその政策的效果を吟味するのである。それは自由競爭の組織の場合のみならず、獨占組織の下に於ける影響をも論じ、ダンピングの問題にまで及ぶ。

最後に彼は貿易政策手段の具體的技術を說明する。其處では關稅法の內容及び適用の形式、通商條約が主として論ぜられて居る。而して最近保護貿易の爲めの具體的技術は著しく發達した。それは量的に增加したのみならず質的にも變化し、輸入割當制度、爲替管理制度、爲替清算制度、輸出入獨占等々新しい政策手段が次々に顯はれた。ハーベラー自身英譯版序文に於て云へる如く、一九三三年に出版された本書に於て之等の問題に觸れられて居ないのは止むを得ない事であらう。

本書の內容は大體以上の如くである。本書の特色を一言にして云へば理論的考察の豐富な事につきる。尙ほその企圖する所は、正統學派潮流に於ける從來の諸理論を整理し、更に一般均衡原理を以て之を體系付ける事であり、その點で學ぶべき多くのものを見出す。從つて貿易理論研究家にとつて一讀に價する書として敢へて此處に紹介する次第である。

（一九三六・一〇・一六稿）

W. T. C. King; History of the London Discount Market, 1936.

山本　登

ロンドン金融市場は英國に於ける金融の中心であると同時に、其の整備された組織並びに世界に於ける英國の經濟的優越に依つて過去二世紀に亙り世界大戰に至る迄世界最大の國際的金融市場を形成し、更に戰後に於ける米國ニューヨーク金融市場の飛躍的進出にも拘らず尙ニューヨークと共に世界金融中心地の一たる地位を保持してゐる。而して此のロンドン金融市場の特色を爲すものは實に其の割引市場である。蓋し著者によれば「ロンドンが一の國際的金融中心地として優越を誇る所以のものは其の專門化された割引市場に負ふ所大である」（序六頁）。併じ乍ら同金融市場の優越性は國際的部面に限られず、對內的にも世界の他の如何なる金融中心地に比して、其の莫大なる金融取引の迅速にして且一般信用組織を攪亂する事少き事、中央銀行の統制大力なる事及び大藏省の要求を圓滑迅速に充足する事等の諸點に於て評價される。而して「ロンドン市場の此の國內的優越性も亦國際的部面と等しく其の割引市場の特殊の組織及能率に歸し得る」（序六頁）。斯くの如く割引市場はイギリス銀行制度の一の本質的部分を形成するにも拘らず、其の發展を辿り或は如何にして又何故にそれが其の獨特の且優秀な形態を採るに至つたかを示さんとする試みは從來爲されなかつた。從つて本書は此の方面に於て先鞭を付したものと云ひ得る。著者は先